

「アングロ・サクソン年代記」にみる デン人への英国島蹂躪の足跡

小林 絢子

現在イギリス人が住んでいる島、即ちブリテン島はヨーロッパ大陸とは狭い海峡を隔てて隣接しているので、古来度々大陸からの侵略を受けた。その島の現在の住民であるイギリス人（アングロ・サクソン人）の最初の断続的ではあるが長く続いた防衛戦は対デン人戦であった。その戦いの跡を辿るにあたって、まずこの島の人種的成り立ちを概観してみたい。

新石器時代にどのような人種がこの島に住んでいたか、正確には不明であるが、最古の住民といえば、紀元前20世紀頃にイベリア半島から渡ってきた人々といわれている。⁽¹⁾その後、ヨーロッパ大陸のもっと北の方即ち中欧から鉄器文明と共にケルト人がベルギー等を経由して入ってきて定住した。

ジュリアス・シーザー（Julius Caesar BC102-BC44）が紀元前55年と54年にブリテン島に來襲して遭遇したのは鉄製の武器や戦車を使い、顔に刺青をしたケルト人の一派のブリトン人（Britons）であった。⁽²⁾現在、イギリス人のことを広義でブリティッシュ人（British）というが、これはアングロ・サクソン人の子孫であるから、ケルト人の子孫であるブリトン人とは異なる。ブリトン人に対するローマ人の侵略はシーザー以後1世紀ほど途絶えたが、紀元47年のクラウディアヌス帝（Tiberius Claudianus BC10-54 AD）の渡英以後360余年にわたってブリテン島にはローマ軍が駐留することになった。原住民のブリトン人はケルト語を話したが、政府や軍の用語や記録はラテン語が使われていたことは広く知られている。

ローマ軍の撤退後約40年経った紀元後449年に、それまで度々大陸から

イギリスの海岸を襲ってきてはいたものの定住しなかったアングロ・サクソン族が今度は本格的にブリテン島東南部から入ってきた。ケルト人の部族長ヴォルティゲルン (Vortigern) の要請によるといわれている。アングル人は大陸ではユトランド半島南部に住み、サクソン人やジュート人と境を接して住んでいたという。「イギリス」即ちイングランドが「アングルランド」(Ængla-land) の縮まった形であり、形容詞形 Ænglisc がその民族名であることはよく知られている。

以後、このアングロ・サクソン人の住むブリテン島には1066年北フランスからノルマン人 (Normans) が侵入し、ウィリアム征服王 (William I) がそれまでのアングロ・サクソン王朝にとってかわってノルマン王朝を創始したが、支配される住民はイングランド人として現在まで連綿として続いている。およそこのような過程を経て今のイギリスという国は成立した。その間、特に成立初期に、「東京家政大学英語英文学研究」第11号の拙著“中世英文学にみるデーン人とヴァイキング”⁽³⁾に書いたように、いわゆるデーン人 (スカンディナヴィア半島のデンマーク地方の民族についての総称) による度重なる侵略が英国島の住民を度々窮地に陥らせた。先に述べた449年のアングロ・サクソン人の侵入以来、アングロ・サクソン王国としてノーサンブリア、マーシア、イースト・アングリア、イースト・サクソン、サウス・サクソン、ウエスト・サクソン、ケントの諸王国が勃興したが、それらは皆程度の差こそあれ、デーン人たちの来襲に苦しめられたのである。

ウエスト・サクソン王国のエクバート (Egbert 在位800-839) がデーン人を撃退して領土を保持し、このことがきっかけとなって英国島はようやくアングロ・サクソン族の手に取り戻せたが、その孫のアルフレッド大王 (Ælfred, the Great -899) が艱難辛苦の末、デーン人の酋長グズラム (Gūþum) と条約を結び、デーン人のデーンロウ地域での定住を許し、キリスト教化しても両民族の間の戦いは絶えなかった。イングランドの統一はアルフレッド王の孫のアゼルスタン王 (Æþelstan 在位924-939) の時代によりやくなされたが、その後もデーン人の侵略は続く。アルフレッド王によっ

て編纂を命ぜられた「アングロ・サクソン年代記」にはその有様が詳細に記されているので、今回はデーン人とアングロ・サクソン人のイギリス島における戦いの場をテーマに同年代記を読んでいくことにする。同年代記はビード師 (Bede fl. c.730) の *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* をもとにウィンチェスター (Winchester) で編纂されはじめ、アルフレッド王の在世時を遙かに越えて書き継がれた。主写本としても7種類あり、地方の古い記録や民間伝承も加えた最後のほうはピタバラ修道院 (Peterborough) で書かれたことは同年代記研究者の一致した意見である。今回は Earle and Plummer の校訂本 *Two of the Saxon Chronicles*⁽⁴⁾ をもとに Swanton の現代英語訳⁽⁵⁾ を使用し、地名等の古形と現代語の地名の関係は両者の註や大沢一雄編著版⁽⁶⁾ を参考にすることにした。

「アングロ・サクソン年代記」の記述はキリストの生年即ち紀元の初めからはじまるが、その前文として、アルフレッド王に敬意を表すためであろうか、ウエスト・サクソン王国の祖先の家系が連綿と語られている。それからブリテン島の大きさと、そこで話されている言語、人種についての記述がある。それから、ジュリアス・シーザーの侵攻と撤退が簡潔に述べられている。紀元46年までは専らローマの皇帝たちのローマでの消息であり、ブリテン島には関心を持っていない。47年に初めて「クラウデアヌス帝 (Claudius) がブリテン島を占領した」と簡単に書いてある。それ以後約3世紀半もローマ軍による占領時代が続くのであるが、その間ブリテン島についての記述は2回しかなく、1つは167年にブリテン王ルーシウス (Lucius) がキリスト教徒にしてほしい、とローマ司教に書簡を送ったこと、もう1つは189年にローマ皇帝セヴェルス (Seuerus = Severus) がブリテン島の海岸に土壘をめぐらしたことである。381年に皇帝マクシムスの生まれはブリテン島だという記述があるが、かれはゴール (今のフランス) で活躍したので、ブリテン島との関係は生地以外に無い。ローマの消息の他はキリスト教の使徒たちの活躍、宗教会議の記述が記録されているだけである。409年から418年の間にローマ人たちはブリテン島にあった自分たちの財宝を地中に隠したりゴ-

ルに持っていったりして漸次ブリテン島から去っていった。それから、歴史上有名な443年の出来事、前述したVortigern王によるアングロ人招聘の記述が出てくる。ブリテン島のケルト人であった彼は北方のケルト人の侵入を恐れて対抗するために援軍が必要だったという。その後はアングロ・サクソン7王国の建設と王国間または地域間の戦いが順次書かれている。ただしイギリスの歴史として現代的観点からは大切なキリスト教化とラテン文字の導入を果たしたアウグステイヌスの渡英については、その4年後の601年の記述に派遣元のグレゴリウス1世が彼に祭服と伝道師をたくさん送ったとあるだけである。

王国定着後のイギリス島をデーン人が襲った最初の年は789年ということになっているが、この年代記では787年(写本によっては789年)の項で、ウェセックス王Beorhtricの時代にNorþmann (=Northmen) が3隻の船で襲来した、と述べているだけである。その場所もは書かれていないが、後の研究で英国南部のポートルランド沖ということになっている。793年の英国北方のノーサンブリアのリンディスファーン(Lindisfarne)の修道院における略奪と殺戮については大規模で惨憺たる記述が残っている。しかしこの来襲は短時間で終わった。796年にはまたノーサンブリアのドネムス(Donemuþ = Jarrow, Durham)の修道院で略奪があった。それ以後約30年間はデーン人についての記述はなく、専らウェセックスのエグベルト王の活躍と覇権の確立の有様が描かれているのみである。しかし彼の晩年の5年間にはデーン人の来襲は復活し、835年にSceapig (=Sheppey, Isle of Kent)、翌年には35隻の船でCarrum (=Charmouth, Dorset)に来て彼らはエグベルト王と戦って居座った。838年にはCornwallに来たが、今度は王が追い返した。エグベルト王は37年余もウェスト・サクソン王国を統治したばかりでなく、マーシア、ケント、サセックス、エッセクスなどの王国まで支配下におき、息子たちに遺贈した。それは王の才覚ばかりでなく、デーン人の干渉がまだ間遠であったという幸運の賜物でもあったといえよう。というのは彼の死の翌年からほぼ毎年のように大小さまざまな規模のデーン人の来襲があったか

らである。840年には33隻がHamtun (=Southampton)に來襲したが英国軍はこれには勝利した。しかし同年のPort (=Portland)でのDorsetの住民による撃退は不成功に終わった。841年にもLindseyやEast Angliaでデーン人による大量殺戮が行われた。843年にはCharmouthの海戦で英国軍は敗北。しかし、848年と850年にはそれぞれPedridanmupa(=mouth of the Parrett, Somerset)およびWicganbeorg (?Weekaborough, Devon)で勝利した。またSondwic (=Sandwich, Kent)でも勝利したが、南方のTenet (=Thanet, Kent)に逃げ込まれ、これがデーン人最初の越冬経験となり、以後たびたび越冬されてしまうことになる。850年にはまた、東でもデーン人の大軍がテムズ河口を經由してカンタベリーとロンドンを襲い、南方に向かって川を渡って、Surreyに入った。先のウェセックス王エグベルトの息子アゼルウルフ王 (Æpelwulf)はその長子アゼルバルド共にAclea (=Ockley, Surrey)で戦ってその大軍に勝利した。テムズ河に來た時には350隻という大船団だったのだからウェセックス王家にとっては未曾有の試練であった。3年後の853年にはThanet島でデーン人とサレーやケントの住民との戦いがあったが、対デーン戦で歴史上有名なアルフレッド大王 (Ælfred the Great)はこの頃まだ少年であり、父アゼルウルフ王によりローマに派遣されていたという。王自身も855年には1年間ローマに滞在するほどだったので、対デーン戦は小休止していたといえよう。アゼルウルフ王の後を継いだアゼルバルド (Æpelbald)は5年間王位にあったが、その間デーン人が來たという記述はない。彼の死んだ860年に弟のアゼルブリフト (Æpelbriht)が王となってまた5年間統治したが、その5年間についてもデーン人の記述はない。史実としてはその頃ウェセックスを避けた北東部やイースト・アングリアではデーン人が定住をはじめていたらしいが、このことはこの年代記ではふれられていない。

デーン軍の攻撃が激しさを増すのはアゼルバルドやアゼルブリフトという兄たちについてアゼルレド (Æpelred)が王(在位866-871)になって3年程してからである。在位初期の865年にはデーン軍はケント州を荒らしたが、

お金をもらう約束をとりつけたただけでおさまった。イースト・アングリアに
来たデーン人も馬をもらったという。翌年には北のヨークでもデーン人との
戦いがあったが、和平がなりたった。その翌年の867年にもデーン人はマー
シャのノッテインガム (Snotingaham = Nottingham) を攻撃したが、援軍を
頼まれたウェセックスのアゼルレド王と弟 (のちの Ælfred the Great) が
無事和平にこぎつけ、翌1年間はデーン軍はヨークにとどまったという。

しかし869年になるとデーン軍は勢いを盛り返し、マーシアを横断して修
道院を複数荒らした。そして翌870年にいよいよウェセックスに迫り、レデ
イング (Readingas = Reading, Berkshire) で上記のアゼルレド王と弟アル
フレッドの軍と戦った。その4日後には Æscesdun (=Ashdown, Berkshire)
でも戦った。ここでは一応敵を敗走させた、とある。これが有名
なアッシュダウンの戦いである。さらに2週間後ベーシング Basingas
(=Basing, Hantshire) で、2ヶ月後マレドン (Maeredun=?Marden, Wilt-
shire) で2人はデーン軍と戦ったが勝負はつかなかった。そうこうしている
うちに871年にアゼルレド王が無くなり、アルフレッドが王となった。

アルフレッド大王のデーン軍との苦闘は大変によく知られている。871年
から彼の没年とされている899年までの28年間はただただデーン人との戦
いに明け暮れたといつてよい。アルフレッドは即位後1ヶ月以内で Wiltun
(=Wilton, Wiltshire) をはじめテムズ河南方でデーン軍に対して9回に及
ぶ戦いを挑んだ。そしてその年の末には和睦したが、一部はレディングを離
れ、ロンドンへ行き、その翌年にはノーサンブリアに侵入し、リンゼー
(Lindsey) のトークセイ (Turecesiege = Torksey, Lincs.) にとどまった。
873年にデーン軍はレプトン (Hreopedun=Repton, Derbys.) で越冬したが、
翌年にはそこから出て行った。しかしそれは撤退ではなく、更に北方のケル
ト人 (ピクト族やストラスクライドのウェールズ人; the Strathclyde
Welsh) を蹂躪するためであった。タイン河畔で越冬し、今度はケンブリッ
ジにまで南下して、そこに1年間滞在した。アルフレッド王はもっと南の海
に出て7隻の船と戦い、一艘を捕獲、残りは敗走した。翌875年デーン軍

はアルフレッドのいるウェセックスは避けて、ウェルハム (Wareham) に入ったが、アルフレッドとの一時的和平により、一部はエクゼター (Exeter) に退き、一部はノーサンブリアに行って農業に従事することになった。

878年はウェドモア条約の年として名高い。アルフレッド王とデーン軍の王のグズルム (Godrum, Guprum, Guthrum) との間の和平協定である。年初にはまずデーン軍がチペンハム (Cippanham = Chippenham, Wilts.) へ行き、ウェセックスを蹂躪してアルフレッド王以外の住民を屈服させた。そこで王は少人数の部下をつれて森の沼沢地に入った。この逃避行の逸話が多いが年代記では特には触れていない。その間ウェセックスのデボンシャー (Devonshire) では800名余のデーン人が殺されたという。アルフレッド王はアゼルニー (Æþlingaieigg=Athelney in Sumursæte = Somerset) に築城し、そこを拠点にデーン人と戦いをつづけた。復活祭から数えて7週間目に彼はセルウッド (Sealwidu = Selwood, Somerset) を通って Ecgbryhtestan = Brixton Deverill, Wilts.?) へ行き、通過点の人々を含めて歓迎を受けた。翌日彼はエデイントン (Eþandun=?Edington, Wilts.) に行き、デーン人をさらに敗走させた。そして前出のアゼルニーに近いウェドモア (Webmor = Wedmore, Somerset) において、この年度の冒頭に述べたウェドモア条約が結ばれた。グズルムの洗礼もここで行われた。翌年にデーン軍はサイレンセスター (Cirencester) からチペンハム (Chippenham) に行き1年間滞在したが、平穏であった。その翌年もイースト・アングリア方面に行った軍もあったが、一部は大陸に渡って行き、無事で、その平和は海岸での882年の小海戦を除き、ウェドモア条約以来7年間ほど続いた。

884年にデーン軍はロチェスター (Rochester) を包囲したが、かけつけたアルフレッド王にけちらかされた。その上アルフレッドの海軍はストウ河口 (Stufemuþa = the mouth of the Stour, Essex) で16隻のデーン人の船をつかまえて、乗組員を殺した。年末にはイースト・アングリアにいたデーン軍が戦争をしかけてきたが、すぐに大陸に渡って行った。886年にアルフレッド王はロンドンへ行き、その地の守りを太守にゆだねた。その後888年から

5年間はデーン人との戦いの記述はない。

892年になるとデーン軍はまた矛先を英国に向けた。250隻の船団を組んでリム河口 (Limenemupa=Lymne Harbour, Kent) に侵入してきた。そして Andred (=the Weald, Lent and Sussex) という森の近くまで来て上陸した。次に別のデーン人軍が80隻の船でテムズ河口に侵入して、ミルトン・ロイヤル (Middeltun=Milton Royal, near Sittingbourne, Kent) を拠点にして、翌年アルフレッド軍と陸海での戦いになった。王軍はデーン人の略奪品がエセックス経由で海外に運び去られるのを阻止。デーン人はノサンブリアに散らばっていた仲間を集めて北方の航海に出たり、エセックス州にいた仲間と落ち合ったりしたが、南方に行った王軍はエクセターを包囲して逆に金品を奪ってロンドンに送った。王軍はデボンでも海上のデーン人と戦った。王の留守をゆだねられた太守たちは大規模な戦いをセヴァーン河畔の Buttingtun (=Buttington Tump) で繰り広げて優勢であったが少数の生き残りのデーン人は Chester (Cheshire 州) は反撃を続けた。そして Chester から Wales へ移動していった。翌895年には彼らが Lea 河に築いた砦に彼らの船を近づかせないようにアルフレッド王が柵を作らせたので、彼らは逃げて、ブリッジノース (Cwatsbrycge=Bridgenorth, Salop) に砦を建てた。876年にはデーン人のある者はイースト・アングリア、ある者はノーサンブリアへ逃げ、ある者は国外にわたった。前二者はウェセックスの南海岸をまた襲ったが、アルフレッド王はデーンの船の2倍の長さの船の建造を命じたので、それを9隻使って彼らを敗走させた。イギリス人62名、デーン人120名が死んだ。夏にはデーン人の船が20隻陸南海岸で沈没した。アルフレッド王は899年に没したが、この海戦の勝利が彼の対デーン戦についての最後の記述である。

アルフレッド王の息子エドワード (Eadward=Edward) の即位後、4年間程はデーン軍の来襲は書かれていない。904年になって、エドワード王の叔父に当たるアゼルワルド Æþelwald=Athelwold がそそのかしたのでデーン人がマーシアを荒らし、クリックレード (Creccagelad=Cricklade,

Wilts.) 経由でテムズ河をわたり、ブレードンの森 (Braden=Braydon Forest, Wilts.) でエドワード王と戦った。デーン人の味方をしたアゼルワールドを含めてデーン側の死者の数の方が多かったという。そして翌年イースト・アングリアとノーサンブリア両地方にいたデーン軍とイギリス軍は和睦したので、907年と908年には彼らとの戦いの記録はない。

しかし909年にはエドワード王のほうから、すなわちウェセックス、マーシアの両国から軍を送り、北方のデーン軍を襲った。そして翌年テテンホール (Toetanhealp = Tettenhall, Staffs.) で両軍は戦い、イギリス軍が勝った。その戦いの余波は翌年も続き、北方のデーン人は今度はマーシアで略奪し、王軍はそれを背後から襲って数千人を殺した。マーシアの太守の未亡人がシェルイエアト (Scergeat=Shrewsbury?) やタムワース Tamaweorpig = Tamworth, Staffs.) などに砦を築かせた。914年と915年にも Cheshire、Warwickshire や Derbyshire のあちこちに砦が作られたが、受身形で書かれていて施工主は記されていない。

917年にはデーン軍はノーサンプトン (Hamton = Northampton) とレスター (Leicester) から出撃し、フックノートン (Hocneratun = Hook Norton, Oxon.) を荒らしたが、住民の力に負けた。その翌年英国島対岸南方に位置するブルターニュ (Ludwiccias = the Bretons, Brittany) からデーン軍の大船隊がセバーン河口 (Sæfermuða = the mouth of the Severn) 経由でウェールズに侵入してヘレフォード (Hereford) とグロスター (Gleawe-ceaster=Gloucester) を襲ったが、住民に撃退されてブラッドホルメ島 (Bradance = Flat Home Island, Somersets.) へ逃げた。そこでは飢えがまっていたので、彼らはさらに南ウェールズ、アイルランドへ逃げていった。残ったデーン人やノーサンプトンに住むデーン人はエドワード王に臣従した。918年までマーシャ王未亡人のアゼルウレッド (Æþelflad) は頑張ってレスター砦を守っていたが、この年死亡した。エドワード王はその翌年から921年にかけてベッドフォードやモルドン、トースター (Tofecestre = Towcester, Northants.), ウィグモア (Wigamere =

Wigmore, Herefordshire) の各所に砦を作らせたり、修理させたりした。921年夏にデーン軍はトースターをおそったが失敗して撤退。それからバーンウッド (Byrnewudu=Bernwood Forest, Bucks) とエール(Æglesbyrig=Aylesbury, Bucks) で略奪した。またハンテイングトンとイースト・アングリアから出て行ってテンプフォード (Tæmesefore = Tempsford, Beds.) に砦を築き、そこを拠点としてベッドフォード周辺を支配しようとした。さらにイースト・アングリアとマーシャからもデーン人が出てきてウィグモーを襲ったが、エドワード王軍に撃退された。デーン人は秋にケント・サレー・エセックスなどからコルチェスターへ行って、占領した。しかしここはエドワード王によってすぐに奪回された。応援に来たデーン人海軍はマルドンを包囲したが、イギリス軍は反撃して数百人のデーン軍を殺した。ノーサンプトンのデーン軍はエドワード王にパセナム (Passanham = Passenham, Northants.) で降伏した。その後イースト・アングリアでもエセックスでもデーン人の支配下にあった人々がエドワード王に臣従した。特にケンブリッジのデーン軍は王に誓約して支配下にはいった。

921年にはスタンフォード、ウェールズ、マーシア人々がエドワード王に臣従し、翌年には王はセルウェル (Pelwael = Thelwall, Cheshire)、ノーサンブリアのマンチェスター (Maneceaster=Manchester) にまで駐屯地を広げた。さらに翌年ノッティンガム (Nottingham) に砦を築き、ピーク地方 (Peaclond = the Peak District, Derbyshire) へ入り、ベークウェル (Badecanwiellon = Bakewell, Derbyshire) にも築いた。しかし翌924年エドワード王は没し、アゼルスタン (Æpelstan=Athelstan) がウェスト・サクソン王となった。翌年、アゼルスタンはノーサンブリアの王ともなり、北方の人々の臣従も得た。アゼルスタンは933年に陸海軍を引き連れてスコットランドに侵略した。このブルーナンブルフの戦い (the Battle of Brunnanburh = Brunanburh) は937年項にある詩の中でたたえられている。アゼルスタン王は941年に死去し、弟エドモンド (Ædmund = Edmund) が王となった。翌年、エドモンド王はマーシアを征服、2年後の944年にはノー

サンブリアを支配した。945年にエドモンド王はカンバーランドを攻略し、協力者になるという条件でそこをスコット王マルカム (Malcolm = Malcolm I) に譲った。しかし、翌年にはエドモンド王は殺され、弟のエアドレッドが王となって全ノーサンブリアを支配することになった。

947年、エアドレッド王はチェスターフィールド (Ceasterford = Chesterfield, Derbyshire?) でデーン軍と戦って勝利した。エアドレッド王は9年余りの在位の間はずっとデーン人を抑えたが、955年に死去し、前王エドモンドの息子のエドウィー (Eadwig = Edwie, Edwy) が即位した。そのエドウィーも4年後には亡くなり、959年にはその弟のエトガー (Eadgar = Edgar) がウェセックス、マーシア、ノーサンブリアの王位を継承した。エトガーは平和王として、その治世が比較的平穏だったということと、在位13年目の972年にバースで聖別された王として有名である。年代記の記述でもデーン人との戦いはほとんどなく、963年に修道院建立の長い記述がのっているのが特徴的である。そして975年には詩の形で王の死去が述べられている。次には息子のエドワード (Eadward = Edward) が王位についた。

978年にはエドワード王が死んで、弟のアゼルレード (Æpelred II) が王位についた。その3年後からまた海外からのデーン軍の襲来が増える傾向にあるが、デボンやウェールズの海岸がまず侵略され、サザンプトンでも略奪があり、ロンドンで大火があった。その6年後、987年にはウェチエット (Wecedport = Watchet, Somerset) の侵略の記述があり、その4年後、991年にはイプスウィッチ (Gypeswid = Ipswich, Suffolk) が襲われたという記述がある。この年は有名なモルドン (Maldon) の戦いが 太守ブリヒトノス (Bryhtonop = Byrhtnoth) とデーン軍の間で行われた。また、海岸に来襲する恐れから、デーン軍に対して和平金を (この時は1万ポンド) 払うことになった。これはこれから倍増する。

この時からまた船団からの攻撃が強まり、992年イースト・アングリアとロンドンからのイギリス海軍と交戦、大殺戮が行われ、993年には93隻がフォルクストーン (Stan = Folkestone, Kent)、サンドウィッチ、イプスウィチ

等を襲った。北方でもリンゼー (Lidesig = Lindsey) ノーサンブリア等にまたデーン人が侵入してきた。994年にアンラフとスウェイン (Swegen, Svein, Swein) が94隻の船を率いてロンドンに来襲し、エッセクス、ケント、サセックス、ハンプシャーなどで大殺戮と略奪を行って、和平金1万6000ポンドを得てサザンプトンに引き上げた。これからはスウェインの継続的来襲が年々行われる。和平金も1002年には2万4000ポンドとなった。この年にアゼルレード王がノルマンディー公の妹のエマ (Emma) と結婚して、少しは平和になるかと思いきや、アゼルレードの愚かなデーン人殺戮命令に憤ったスウェインはすぐにウィルトンやソールスベリー (Searbyry = Salisbury) に戦いを仕掛けてきた。翌1004年にはスウェインは船隊を組んでノーウィッチ (Norþwic = Norwich, Norfolk.) を襲い、次にイースト・アングリア軍をおそった。1005年はイギリスは飢饉だったのでデーン人は来てもすぐ去ったが、1006年になってからはサンドウィッチをはじめウェセックス、マーシア全域で略奪を繰り返した。1007年には和平金な3万ポンドとなった。1009年から1012年にかけてはスウェインがウェセックスとマーシアに大攻撃をかけ、4万8000ポンドを受け取っていった。1013年にはスウェインがロンドンをねらったのでアゼルレード王はノルマンディーに亡命した。そこでスウェインが一時イングランドを支配したが翌年死亡したので、アゼルレード王は北デーンロウのデーン人を撃退することが出来た。

しかし、スウェインには強力な息子クヌート (Canute, Cnute) がいて、彼は1015年にウェセックスに来襲、デーンロウ全体を支配するようになった。1016年にアゼルレード王がロンドンで急死するとクヌートはアゼルレード王の息子エドモンド (Eadmund = Edmund) にウェセックスを譲り、自分はテムズ河以北を支配することに決めた。しかしエドモンドはすぐに死去してしまっただので、クヌートはアゼルレード先王の未亡人のエマと結婚し、1035年まで英国の王として20年間近く君臨した。

クヌートの英国侵略と英国支配についても年代記に詳しいが、彼と彼の息子たちが一時英国の王座についたこと (クヌートの先妻の子ハロルド1世

(Harold = Harald I: 在位 1036-1040) という事と、クヌートとエマの子ハルデイクヌート (Harþacnut: 在位 1040-1042) についての記述はデーン王朝時代のこととしてそれまでのヴァイキングとしてのデーン軍の侵略とは別個に扱うべきと考えるので、ここでデーン人侵略の足跡の記述は終わりとする。ハルデイクヌートの後はアゼルレードとエマとの間の息子エドワードが26年ぶりにアングロ・サクソン人としての王となった。次世代にはまたノルマンディーからの侵略を許すとしてもエドワード王の治世24年間はイギリスの王位は安泰であった。その後「アングロ・サクソン年代記」にはノルマン征服 (the Norman Conquest) とノルマン王朝の始祖であるウィリアム (Willelm=William 在位 1066-1087) についての記述が続くが、ウィリアムとその臣下のノルマンディー人の諸侯はもはやデーン人とは呼べない。ヴァイキングもノルマン人の子孫ではあるが、セーヌ河の北にノルマン公国の設立を許されて以来すでに100年を経過してキリスト教化し、フランスのカロリング統治体制に準じていたからである。

この「年代記」の写本の中で一番おそくまで書き継がれたLaud写本はピータバラ (Peterborough) 修道院にあったものが1116年の火事で焼失し、カンタベリーの聖オーガステイン寺院所蔵のものをピータバラ修道院で転写されたものである。それはさらに1121年までピータバラ修道院で書き継がれ、その後も同地で断続的にあるいは一度に1154年まで続けられた。⁽⁹⁾ そこにはウィリアム王の死後ますます強まったノルマンディーからの貴族や聖職者の渡来とウィリアム王の息子たちとの仲違い、覇権の確立、最後の方はウィリアム王の娘アダラ・マチルダ (Adella-Matilda) の夫スティーヴン (Stephne de Blais, Stephen) の圧政等が描写されていて、もはやデーン人の影はない。デーン人の来襲はこのようにして終息したのである。

注

- (1) 富沢靈岸著 「イギリス中世史」 ミネルヴァ書房 1991年 p.2.
- (2) 廣實源太郎他編 「西洋史辞典」 創元社 東京 1994年 p.674.
- (3) 「英語英文学研究」 第11号 東京家政大学英語英文学会 2005年 pp. 1-10.
- (4) Plummer, Charles and John Earle Eds. *Two of the Saxon Chronicles*, Vol. 1, Clarendon Press, Oxford, 1972.
- (5) Swanton, M.J. Tr., *The Anglo-Saxon Chronicle*, J.M. Dent, London, 1997.
- (6) 大沢一雄著 「アングロ・サクソン年代記研究」 蒼洋社出版 1991年 754年から845年までは正しい年に直して引用(大沢 p.198 注195)。
- (7) よく知られた地名は片仮名で記す。
- (8) 人名もよく知られている場合は片仮名でしるす。
- (9) 久保内端郎他著 「ピータバラ年代記の言語」 学書房 1993年 ピータバラで書かれた「アングロ・サクソン年代記」の内訳は Copied Annals (BC 60-1121 AD), First Continuation (1122-1131), Final Continuation (1132-1154)となっている。